

動物愛護読本

三キオの
ふしぎ^{たい}げん^{けん}体験



東京都衛生局

日曜日の夕方のこと

ミキオが家の近くを

歩いていると、

とつぜん大きな声が出た。

「このどんぼろネコ！」

見ると、となりのおばさんが、

ミキオが飼っている

チコを追いかけている。

どつやら、台所へしのびこんで

魚をぬすんだらしい。



「うちのネコをいじめないで。」

ミキオはそうさげぼうと思った。

けれど、なぜか声が出なかつた。

「まったく、はらがたつ。」

庭でうんちはするし、

植木ばちはひっくりかえすし、

うちの小鳥をねらうし……。」

おばさんがブツブツ言いながら

もどつてきた。

チコは逃げたようだ。



夕食のあと、

ミキオはチロのことを考えていた。

あるとき、どうして声が出なかつたんだろう。

ボクが飼い主だとわかると、

ボクがおこられると思ったからだろうか。

でも、悪いことをしたのはチロだもんな。

そのときチロが帰ってきた。

「チロ、なんで悪いことをするんだい。」

「いめさね、ミキオくん。」

とじせんチロがそう言った。

「えっ、ネ、ネコがしゃべった!!」



ミキオは、こしをぬかしそつた
なるほど、おどろいた。

ふと、まわりを見ると、

部屋の中の景色が変っていた。

「ミキオくん、ネコの国へようこそ。」

「ネコの国か。」

「そう、ここは私の家。」

ミキオくん、うしろを振り返って

へんごをみるといいたくない。



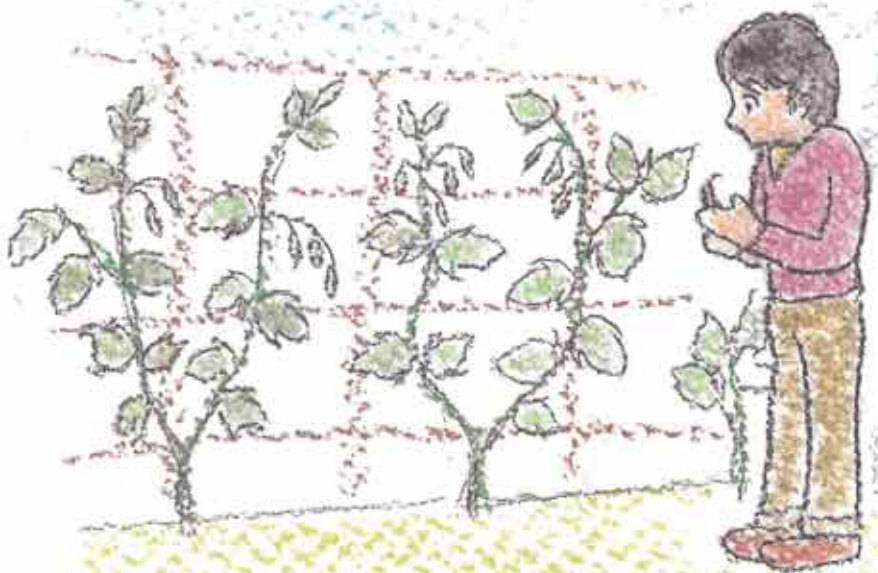
ミキオはネコの国を見たくて、
外を散歩することにした。
でも外にはポツンポツンと
小さな家があるだけで
あとは何も無い野原だった。
「なんだ、別に変ったところなんか
ないじゃないか。」



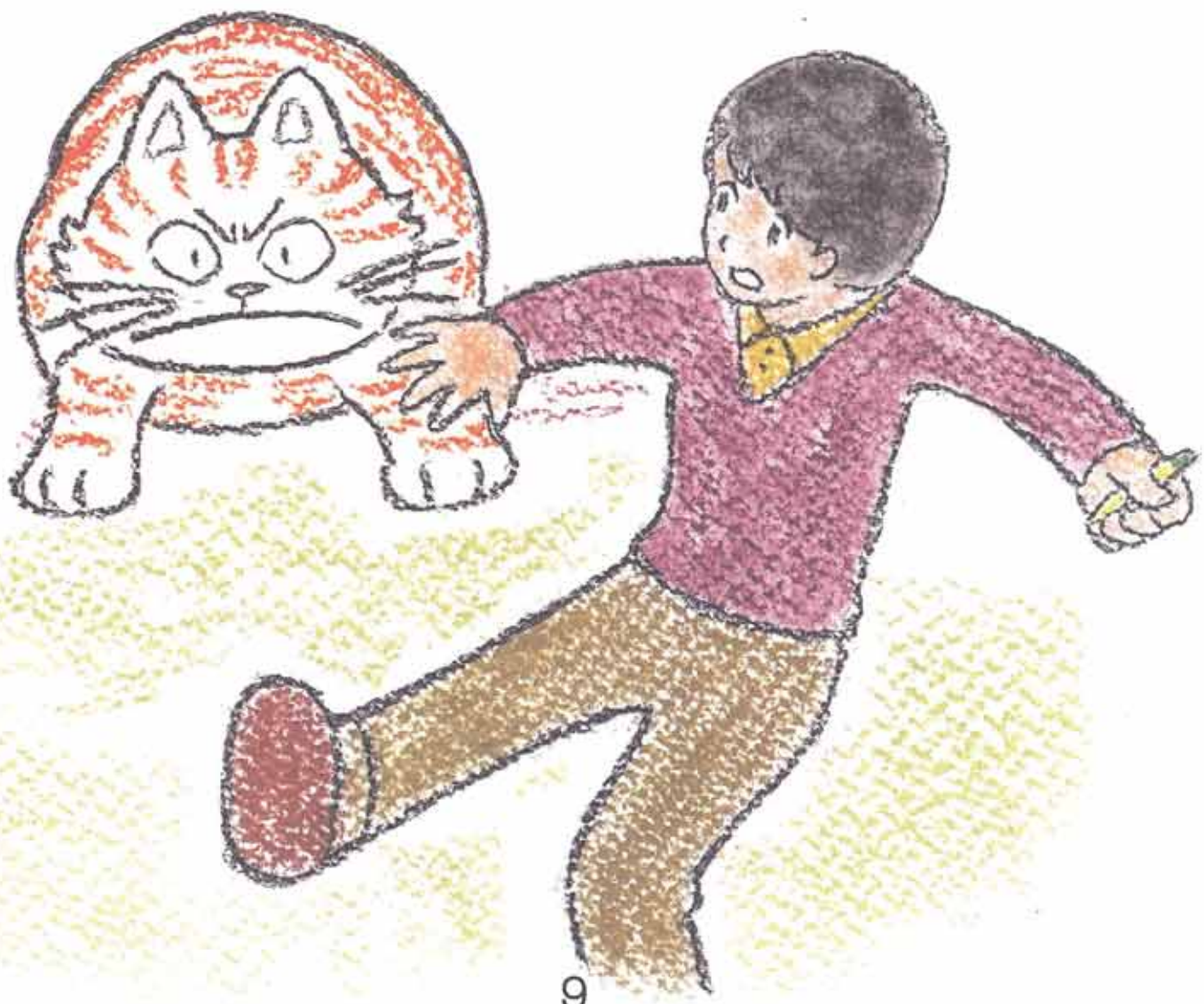
ミキオは途中でおしっこがしたくなかった。
でもネコの国だから、どこにも
人間用のトイレなんか無い。
困ったミキオは、あたりを見まわし、
だれもいなかったので、
近くの草むらで用をたしてしまった。
——ここなら、ただの草むらだから、
だれももんくは言わないだろう。
とミキオは考えた。



またしばらく行くと、
今まで見たことのない変な木があつて、
実がいつばいなつていた。
ミキオは植物に興味があつたので、
なにげなくひとつとつて、
「何の実だろう。食べられるのかな。」
と見ていた。



そのとき、とっぜん、
「ドロボウッ！」
という大きな声がかした。
びっくらしてふりかえると、
山のように大きなネコが、
ミキオに向かつて
走ってくるではないか。
その勢いに、ミキオは
わけもわからず、
あわてて逃げだした。



ミキオは森の中や

しげみの中を夢中で逃げた。

しばらく走ってふりかえるじ、

いつものまにガネコは何びきにも

ふえいふい、

ロクにさけびながら

ミキオを追いかけてくる。

「あの人間が私の大切に育てた

マタタビの実をぬすんだ。」

「勝手に家の中にはいつたんだ。」

「あいつは、うちの玄関で

おしっこをしたんだぜ。」



※マタタビは、森や野原の木にからみつくように生えている木で、
実や葉にネコがとても好きな成分が含まれています。

「自然になつてる実を取っただけだ。」

「何も無い草むらで」

「おしつこをいただいただけじゃないか。」

「ボクは悪いことはしていない!!」

「いんげんけんとでも、」

「ネコたちには通じない。」

「ミキオはついに」

「ネコたちに追いつかれた。」

「わあ、もうだめだ。助けて……。」

「そのとき、ネコたちと」

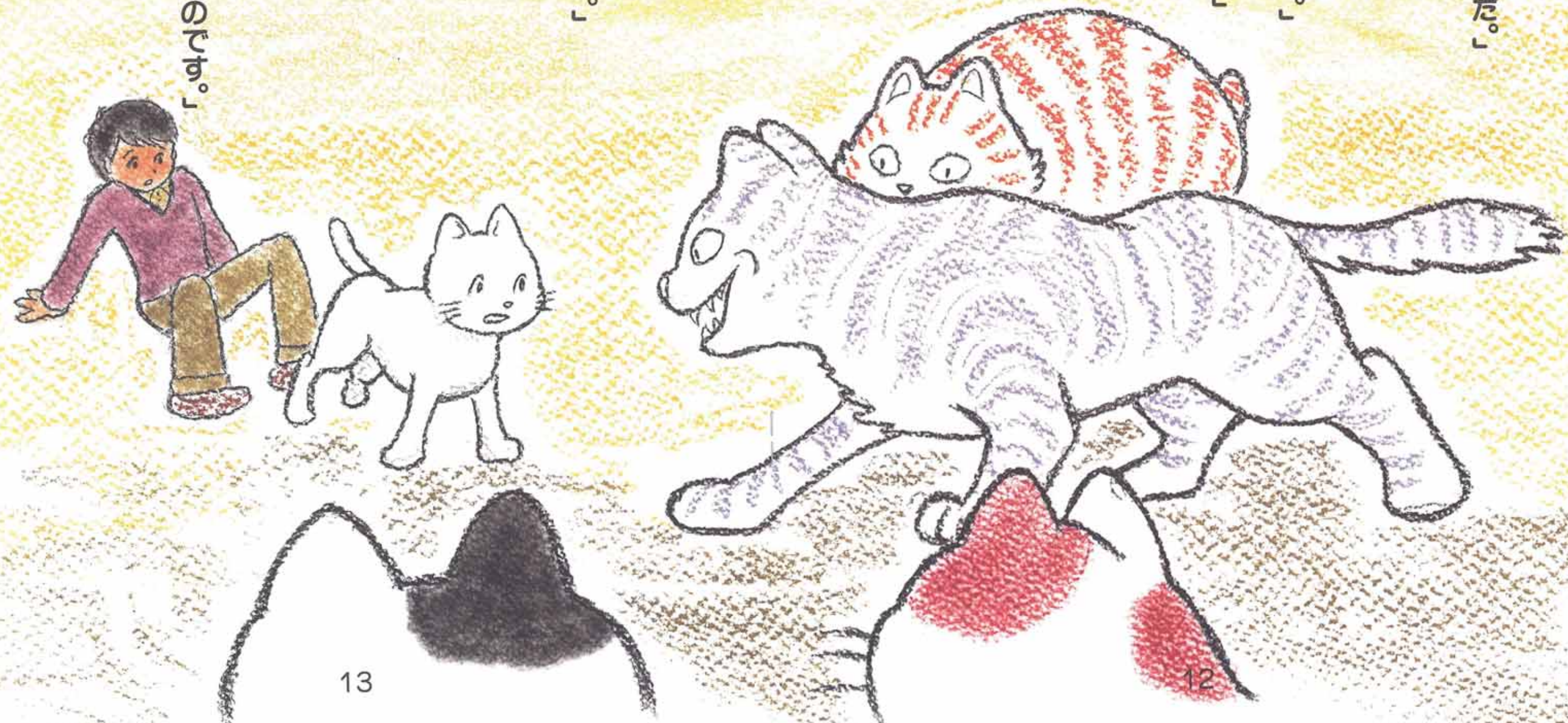
「ミキオの間に、一匹きの小さな」

「ネコがとびこんできた。」

「待って、待ってください。」

「この人間は、うちのお客さんなのです。」

「それはチコだった。」



「それじゃ、この人間がやったことは、
あんたが責任をとってくれるのかい。」
「はい、汚したところは
私がきれいにします。」
「かわしたものは直します。」

「そうか、それなら今回は
ゆるしてやるわ。」
「そう言いつて、ネコたちは
引きあげていった。」

「チ「ごめんね、めいわくかけちゃった。」

「ネコの家は小さいようだけど、

建物のまわりの広い土地が全部家なの。

だからミキオくんがおしっこしたところは、

あのネコの家の玄関だったのよ。

マタタビは、ネコには育てるのがむずかしい、

とても大切に育てるものなの。

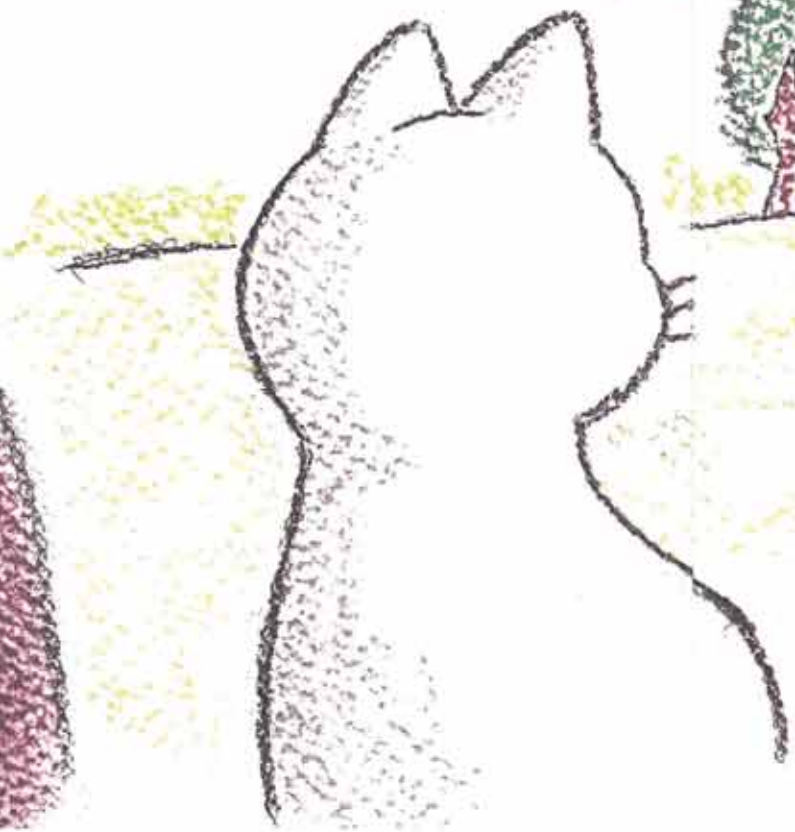
ミキオくんは、こんなネコの国のことを

何も知らなかったんだもの、悪くないわ。

私が気をつけるべきだったの。」

そのとき、ミキオは夕方のことを思い出して、

「あ、あのときのチ」と同じだ。」
と呟けた。



「わかつてくれた？」

ネコにはしてもいいことと

いけないことがわからなくて、

今のミキオくんと同じなの。

悪いことをしようとして

鳥をねらったり、芝生にうんちを

するわけじゃないのよ。」

「そうか、動物が悪いわけじゃないんだ。」

「そう。それから、子ネコが捨てられているのを

見たことあるでしょ。」

「うん。」

「ネコの世界でミキオくんが

捨てられたらどうする。」

ミキオは、自分がもし、だれもいない

知らない所どこにおいていかれたら、

と想像想像してみた。

「おなかがすくし、さみしくい、

こわくて、きつと泣いちゃうな。」

「そうでしょ。死んでしまうかも

知れないし、とてもひどいことよね。

でも、子ネコだつて、ネコの

おかあさんが捨てるわけじゃないの。」



「やっぱり動物が悪いんじゃないやなくて……。」
「ミキオくん、どうしたらいいか考えて。」

そのときミキオは目をさました。

いつの間にか、ねむっていたのだ。

「夢だったのが……。」

そばでチコがミキオを

見つめていた。

「キミはいろんなことを教えてくれたね。」

ミキオはチコを抱きながら言った。

「あした、となりのおばさんにあやまそうし。」

でも、ちよつと勇気がいる。

それから、チコが言っていたことを

考えなければならぬ。

飼い主がしなければ

ならないこと……。

「おとうさんや

おかあさんに聞いて

考えなくちゃ。

それでもわからなかつたら

チコが教えてくれるよね。」

ミキオは、つくえの上で

ママタタの美がのしつるペンシル、

まだ気づいていなかった。



しつもん チコの質問コーナー

*子ネコが捨てられるのはどうして？

命あるものを捨てるなんて、ひどいよね。
子ネコが生まれても、もらってくれる人は少ないの。
それで困って捨ててしまう無責任な飼い主が
いるからなのね。

動物を飼ったからには、死ぬまでめんどろ見るのが
飼い主の責任でしょ。



*でも、生まれた子ネコをみんな飼ったら、ネコだらけになっちゃう。

そうならないようにするには、方法があるの。
それは、ネコを動物病院につれて行って、
子ネコが生まれないような手術をしてあげることなの。

*子ネコが生まれなければ、捨てることもなくなるんだ。

そのとおり。
でも、手術するにはお金もかかるから、
ネコを飼っている人は、おとうさん、
おかあさんに相談してね。



*人にめいわくをかけないためには、どうすればいいの？

よそのうちでうんちをしたり、いたずらをしたりして、
めいわくをかけても、動物には、それが悪いことだとは
わからないの。

それを教えてあげるのが「しつけ」なの。犬でもネコ
でも、悪いことをしようとしたら、その場で「いけない」
と、しかってやるのが大切。

ネコは犬よりしつけはむずかしいけれど、根気よく
教えてあげてね。



*うんちやおしっここのしつけはどうするの？

子ネコのころから始めなければだめだけど、
浅い箱の中に砂や新聞紙をちぎったものを
入れておいて、おしっこやうんちをしそうになったら
すぐつれて行って、箱の中でさせるようにするの。

何回かくりかえすと、そこがトイレだとおぼえる
みたいね。



動物愛護読本
ミキオのふしぎ体験

印刷物規格表第1類
印刷番号(5)969
刊行物番号(H)487

平成6年3月
編集・発行 東京都衛生局生活環境部獣医衛生課
新宿区西新宿二丁目8番1号
☎ (03)5320-4412(ダイヤルイン)
印刷 有限会社 一力印刷所

保護者の方へ

猫に限らず、動物が他人に迷惑をかけた場合、飼い主も、また被害をこうむった人も、その動物が悪い、と考えがちです。

しかし、ほとんどの場合、飼い主の不適切な飼い方が、その原因になっているようです。

動物は人間社会の善悪を判断できませんから、適正な管理としつけによって、社会に迷惑をかけない飼い方をすることが、飼い主の「責任」ではないでしょうか。

子供にとって、動物を飼うということは、生命の大切さを学び、やさしい心を育てるなど、情操教育の上で、大変有意義なことだと思います。

しかし、それも正しい飼い方ができてのことであって、適切な世話ができなかつたり、近所から苦情がくるような飼い方では、逆効果になってしまいます。

また、動物が病気になった時や、不幸なこ犬、こ猫が生まれないようにする不妊手術などは、子供たちだけで解決できることではありません。

子供が飼っているものだから、などと考えずに、子供たちが正しい飼い方をするように指導してあげてください。

また、不妊手術等の努力をしていただくように、お願いいたします。